戦後の混乱期・想い出すままに

岸　和男（海　神・69歳）

〔人の群れ〕

昭和二十年八月十五日正午を境に、軍隊と軍艦や大砲・戦車など戦うための武器を造っていた工場や会社が無くなったのであるから、仕事を失った人が街に溢れ、日を追うに従い、その数は増えていったのである。彼等の殆んどは不潔と空腹で盛り場を右往左往し、人の集まっているところに、更に大きく固ろうとしている。その群がりを形造っている人達は、連合軍の爆撃機による連日の空襲で家を焼かれた一般家庭の人々だった。一方日本国内で守備についていた兵士や中国、東南アジアなどで戦っていたもの、ソ連軍に捕えられていた軍人達もやっとの思いで帰って来たが、家も無く家族にも会ってない人々であった。最も悲惨だったのは、帰る家も迎える家族もいない疎開学童たちであった。戦争中、両親と居住地に別れ、山村僻地に疎開していた小学一年から五年ぐらいの学童達は、昭和二十年十一月頃から続々と帰り始めたが、このうち、何人かは両親・兄弟・親せきを失った戦災孤児と呼ばれた子供達であった。彼らの中には浮浪の途を歩むものもあり、数多くあった。戦争の悲惨はこれらの子供達にも大きくのしかかっていた。

〔船橋駅周辺〕

戦災を免れたわが船橋市の玄関であるＪＲ船橋駅は、焼野原となった東京、千葉市など近隣被災地から家を失った人々が移り住む場所を求めて毎日疲れ果てた姿で到着する一方、被災地の親戚、知人を心配して訪ねるのか、重そうなリュックを背負った人達の出発などで、毎日非常に混雑していた。

昭和二十年十一月頃の駅の建物は、木造平家建、線路は地上に敷設してあり、三十分に一本ぐらいの割合いで、発着する列車はどれも超満員で、出入口もふさがっているので乗客は窓から出入りしていた。その窓には、窓ガラスは全く無く、修理に必要な資材の補充がないためか、冬でも開いていて寒かった。そのうえ電力事情が最悪であったため、電車を満足に運転することができず、蒸気機関車が品質の悪い石炭をたいて列車を引っ張るので、運転ダイヤは不規則・不正確であった。駅の左側（現在西武デパートのあるところ）には昭和産業の製粉工場が、裏側は鴨川ニッケルなどの工場があり、船橋市の玄関口としては粗末なものであった。

この駅から京成船橋駅を経て、本町交差点までの両側は闇市で賑った。配給では絶対に手に入らない、にぎりめし、大福餅、小豆、大豆、タバコ、砂糖、正油、純綿の手拭い、鮮魚類などが大金さえ出せば、なんでも手に入る品物が屋台の上にところせましと並べてあったが、庶民は生つばをのみ込んで空腹に耐えていた。この庶民達がよく引っ掛かったのが、デンス

ケトバクで、タバコの箱三個を巧みな手捌きで操る彼等の魔手に、なけなしの金を巻きあげられたのは私だけではない筈だ。

〔食事情〕

「芋か南瓜を分けて下さい。」、見知らぬ農家を一軒、一軒と歩いたが「供出が大へんで売るものなんか無いよ。」と冷たい返事が返ってくる。もう一軒回ってみよう。疲れた体にムチを打って今日の食糧をどうしても手に入れようと二〜三軒先の農家に「お芋ありませんか。」人の良さそうな、おばあさんが出てきて「おれにはわかんないが夕方おいで、若いもんが帰ってくるから、だけどお金じゃ駄目だべよ。なんか品物がいいよ。」

夕方、疎開しておいた、なにがしかの着物で、わずかな白米、小麦粉、芋等に替えることができた。帰り道食糧が手に入った安心感からかフト明日は俺の誕生日か…。戦争中は誕生日など考える余裕など全くなかったが、やっと走り出した平和の日々が大正十年七月二十七日生まれ、とに角無事生き残った自分を発見したらしい。明日七月二十七日は、駅前の闇市で、バクダンかカストリでも飲むか、背中のリュックの中味が久し振りに充実したせいか足も軽かった。因に米が配給価格で一升五十三銭のとき闇で七十円、なんと一三三倍、にぎりめしの四個十円は二〇五倍であった。

しかし明るい話題もあった。十一月頃になって、市内のなん軒かの食堂が、政府公認で雑炊を売り出すことになった。公定価格で、しかも外食券不要で一人一杯ではあったが、長い長い行列ができた。特に食べざかりの子供を持つ母親は、子供達の手を引いて雨の中何時間でも待っていた姿は今でも思い出し涙が浮かぶこともある。汁ばかりで、米はどんぶりの底に僅かに沈殿する雑炊ではあったが、空腹の虫を数時間でもおさえ気持を満足させることができた喜びは、明るい平和日本を建設するための原動力になったのかも知れない。

〔嗜好品を求めて〕

二十年十月頃から、船橋市内でもモクヒロイが現われた。一メートル位の細い棒の先に縫い針をつけ、それで落ちている煙草の吸い殻を刺して拾い集めそれをほぐして煙草だけを売る人のことである。それを買い英語辞典の紙で巻いて吸ったものである。ときにはイタドリや柿の若葉をかげ干しにして、細かく刻んだものを加え量を増したものだ。また闇市で、医療用エチルアルコールを手に入れ、水割りにして飲んだりしたが、時にはメチルアルコールを飲み失明した人があったということは前にも述べたとおりである。

一方、金のある人は、東京の銀座通りや、横浜の伊勢崎町まで遠出して、進駐軍の兵士が小遣い稼ぎに売るチューインガムやチョコレート、洋モクが一個二十円位で入手できた。

〔衣料事情について〕

衣料品もすべて統制下にあり、これを買うには衣料キップと引き換えに配給を受けるのであるが、民需用の生産は戦争中からストップされていたから、戦争が終った今でも品物が無く、配給制度は無きに等しかった。一方闇市には、一部の生産者や商人が不正に隠匿していた純綿、毛糸、絹織物等、喉から手が出るくらい欲しい品物が、公定価格の一〇〇倍、二〇〇倍の値段で並んでいる。

欲しくても買うことができない一般市民は、スフと呼ばれる粗悪な衣料で我慢していた。スフとはステープル・ファイバーの略で、くず綿と木材

とで造った人造繊維のことで、伸びやすく、しわになりやすく、水に弱いという決定的な弱点があったので、靴下など二～三回の洗濯で必ず穴があくという代物であった。特に乳幼児のいる家では、オムツや下着などに大変困ったのであった。まだ、一般庶民の中には、戦争中特に衣料の将来を心配して地方に疎開させていたものもあった。わが家でも母が、僅かばかりの木綿、毛、絹物を疎開させていたが、これらは自分達で手を通すことはなく、米、小麦粉、食用油、石けん、燃料などを手に入れる交換品として農家や商人達のところに引き取られていった。こんな状況の中ではあったが、旧陸海軍の衣料や生地が戦災で、すべてを失った罹災者に罹災者証明提示のもと、細々とではあったが配給された。

〔戦争は悲惨だ〕

国民の大半は、慢性的空腹を抱え、偏った食事による栄養失調と戦い、石けんや燃料不足で入浴もできぬまま、虱と同居する不潔とも戦いながら、平和日本の国づくりに励んだ。

例えば、腹一杯のめしを食べるには米の増産をしなければならない。それには肥料の増産が必要だ。肥料の生産には大量の電力が必要だとされる。ところが、電力の供給は最悪の状態であった。軍需最優先であったため民需要の補修部品は全く無く、そのため発電能力は底をつき、空襲による罹災で送電施設は僅かしか残っておらず、結局、一般消費者への供給が制限されたので、毎晩、必ず数回の停電があり国民には我慢に我慢をしなければならない状況であった。

しかし、耐乏生活は日本人だけではなかったと思う。戦争とは、勝者も敗者も共に悲惨だと思う。しかも自分達の意志とは関係なく、戦禍に引き込まれた周辺の国々とその国民に対し私達はなんと言って謝罪したらよいのだろうか。